グリフィスの化学実験室の写真について

山下　英一

足羽山の福井市立郷土歴史博物館に残る（春嶽文庫）明治初期の古写真の一枚が、グリフィスの化学実験室の外観ではないかという問題を提起したい。

九月始め、この博物館を訪れて明治初期の古写真を十数枚見せてもらっているうちに、ふと太鼓門番所[1]と簡単な説明のついた一枚の古ぼけた写真に目がとまった。その瞬間、これはグリフィスの化学実験室ではなかろうかと直感したのであった。

というのは屋根の上にガラスをはめたスカイライト（越屋根）のようなものがあり、左の屋根には煙突らしきものがあったからである。この時、頭に浮んだのは、ひとつはグリフィスの化学実験室の見取図[2]であり、ひとつはグリフィスの福井通信のなかに足羽山から眺める市街のなかに、実験室の煙突と足羽川辺の西洋館（グリフィス館）の煙突の二本が見えると書いてあったことである。この二本の煙突がいかにも福井における最初の目立つた新しい文明の象徴であるように思えた。

私の心はすっかりこの写真にうばわれてしまった。まちがいなくこれは実験室だ。確めよう。博物館の伴五十嗣郎氏にきくと、番所であることに疑問を感じているといわれる。私は足羽山の博物館へはいつも木田で電車を下りて、あの狭くて急な石段をのぼることにしているが、帰りはこの石段を気がついてみると、下りていたほど私の心は写真のことで夢中になっていたのである。

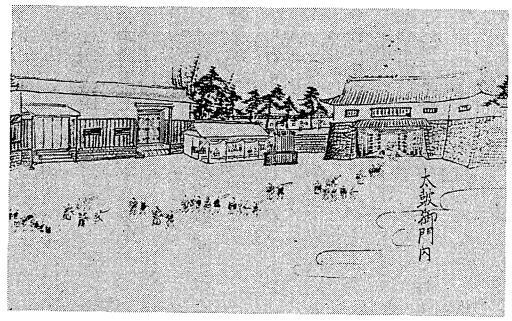
そこでまず見取図とこの写真のコピーをみせて誰かに判断を願うことに決めた。早速、明治村で明治の洋風建築の移築を手がけておられる明治村理事の菊池重郎博士に手紙で、私のこのインスピレーションのことを書いて診断をお願いした。もうその返事の良かれを祈るしかない。一週間ほどしてもらった返事に、写真の建物は〈見取図左の化学実験室だと思う〉[3]とはっきり書いておられた。うれしかった。しかし疑問があるという。まず煙突らしいのが見張台か時鐘ではないか。明新館の場所とここが一致しているかどうかであった。

しかしこれなら県立図書館の舟沢茂樹氏に聞けばわかるのではないか。それからしばらくしてある日曜の午後、図書館へ舟沢氏を訪ねた。話すこと約二時間、舟沢氏は私のインスピレーションを専門家のそれだと感心され、もしそうなら、おもしろい貴重な発見だといって励まされた。

まず太鼓門番所かどうかを確めるために、舟沢氏は福井城周辺の絵巻物を持ってこられた。その太鼓門の絵から、化学実験室と思われる建物と番所と考えられてきた建物をくらべてみると、それはあまりにも大きな違いで、全く別物であることは誰の目にも明らかであった。

ところで明新館の位置だが、グリフィス[4]の福井通信によると本丸が学校になっているということで、しかも太鼓門は本丸外にあったから、いよいよこの写真の場所が本丸の中のどこか空地に建てたものであろうと想像される。

その上、右手の大きな建物もよく見れば、ガラス戸のようなものがはめてあり、ハイカ

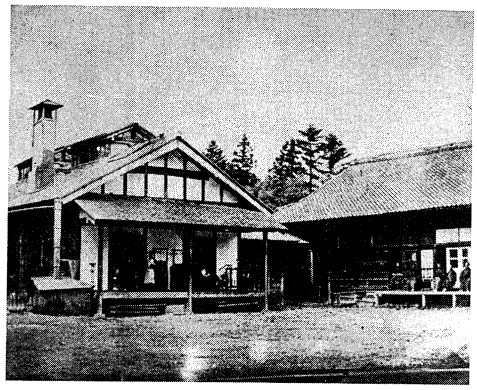


福井城周辺の絵巻物（藩政時代）から

ラナ風景に見えるので、ひょっとしてこれも明新館に関係ある部屋かも知れない。もしそうなら、この一枚の写真はグリフィスの化学学校の珍らしい記録になるかも知れない。しかも写真には人物も写っている。

私は十中八九、この写真がそうであることを願った。そこで、さらにそれを実証するために、グリフィスの日本通信から明新館と実験室にふれる記事を捜すことにした。

さいわい、次に決定的な資料としてもいいものが見つかったので、必要な部分を訳出して読者のご意見をお聞きしたい。この資料は一八七一年一〇月、ラトガース大学の学校新聞、ザ・ターグム紙（三巻七号）に載った、グリフィスの「日本のラトガース大学卒業生」である。この新聞はグリフィスが中心になって創刊したものであった。



○煙突か鐘撞堂か見張所か
○雨受けの防火用水反対側からの移動
○明新館の位置

さて朝食後、暑い日は朝、六時に学校が始まるので、通訳の岩淵が家の玄関で出かける用意をしています。現在の家は約二百年たつ旧家であったが、その家主は最近の内乱で身分と収入を失ってしまいました。料理番の三つになる娘が「サヨーナラ、センセイ」と呼ばりながら、玄関までよちよち歩きをしてきます。見事な古木の陰の下を歩いて、その家の祠の跡を過ぎ、門番小屋（そこの番人は私達が通ると毎日、しかも自発的にその顔を地面につけておじぎをするので、米国人にすると不快な習慣ですが）の前から門を出ます。急流の足羽川にそった通りを、しばらく谷ごしに山を眺めながら、「化学校」と人が呼んでいる学校への道を行きます。途中であう人は、学校へ行く少年。仕事に向う役人。働きに出る労働者。きらきらする黒目にバラ色のほほと真珠の歯の娘。黒玉、夜、暗黒界、エジプト、スペードのエースのようにまっ黒な歯の母親。藁ぐつをはいた馬。（中略）。

福井は城下町で、日本の地方で最初の城の一つとして昔から有名です。だいたいの見当だが、見たところ城のまわりは四平方マイルあるでしょう。城は川に面していて、そこから

明新館にグリフィスが設計した理科室と化学実験室の見取図。
(William Elliot Griffis:Entrepraneur of Ideas by Frances Yeomans Helbig 1966 より転載。ただし見取図内の寸法はグリフィス自身の書いた見取図により筆者が記入した。)

Fig. 2 Griffis's Laboratory Building in Fukui.
(化学実験室)

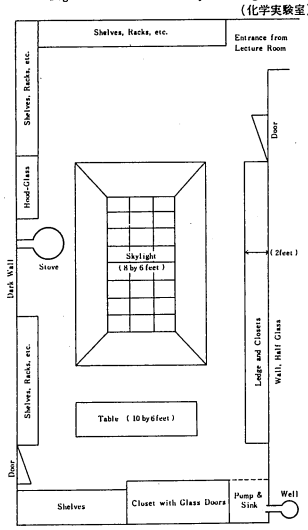
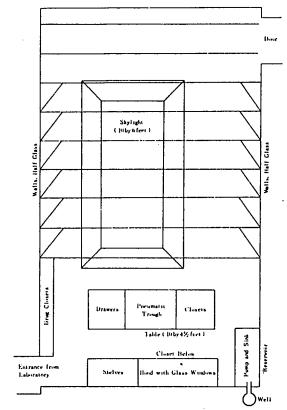


Fig. 1 Griffis's Lecture Hall in Fukui
(理科室)



幅七〇フィートの堀、厚さ二〇フィート、高さ約一五フィートの石壁が数マイルものびて完全に城外をとりまいています。学校につくまでに城の二番目の塁壁に入り、広い堀にかかる橋を渡り、二重の稜堡を備えた城門に入ります。城門には耐火の塔と射手の塁壁があります。約四〇ヤード歩くと、最後の最も広い幅一一〇フィートの堀があり、城壁は水位から約三五フィートで塔と射手の塁壁と狭間がついています。門と本丸が幾重にもとりまいていて、城壁の石はどんな方法で運んできたかがわからないほど大きいものです。この城は長い間、福井と越前の藩主の住居でありましたが、今は藩主の自由かつ開明的な政策により学校に変わりました。ここは大きな平屋造りで、広大な床をおおい、おそらくラトガース大学の四倍の広さはあります。たたみの床、瓦屋根。風通しがよく、天井が高く、日本流に、塗装がなく、非常に清潔です。

福井に来た時、生徒は七〇〇人いましたが武芸所が別の部門に組みこまれて、新しい建物に移ったので、二〇〇人が抜けました。その上、いろんな理由でさらに二〇〇人がやめ

ていったので、今は三〇〇人しかいません。学校は除草された庭のようになりました。このうち一〇〇人ぐらいのよい生徒に私は教えております。日本語と中国語の学校だけで約三〇名の先生と助手がいます。剣術学校がなかで最も活気があります。英学は米国人先生の監督の下にあり、実際の勉強は日本人の英国使節団の通訳をしていた有能な日本人先生が行っています。

では私達の部屋にご案内しましょう。そこは大きな明るい部屋で、南西に面していて、約三五×二〇フィートの広さがあり、壁紙がきれいにはってあります。壁には地図と図表のそばに米国をさすと思われる額に入った絵が何枚もあります。ラトガース大学のクック教授の部屋のように階段をのぼって入るようになっていて、それにふさわしいひじかけ椅子が置いてあり、はだしのままの顔のよごれた、ちょんまげの生徒がよろこびそうです。生徒は米国の学校の学生よりも礼儀正しいと言い切れます、うそだと思ったら日本へ来てみなさい。部屋の南西側はほとんど全部にガラスが入っています。

この大きな部屋につづいて二つの小さな部屋があります。そこにはあらゆる種類の化学薬品や器具があって、全部そろうと米国の多くの大学よりもはるかにその量が多くなるでしょう。実験と講義用の大きなテーブルのそばから実験室に通じるドアがあり、内部工事の仕上がりと外観からその大きさを見ると、日本人はラトガース大学卒業生の私が望むとおりの実験室を完成しようと努力しているのがわかります。頭上に大きなスカイライト（越屋根）、壁に多くの窓、煙突の火花止め、暖炉、ガラス入りの暗い戸だな、テーブル、雨受けタンク、井戸、ポンプ、器具入れなどがあります。それはまるで大へん苦労して少くとも二、三年はたっぷり手をかけて作ったように見えます。

「剽窃にはならないかと思うほど」ラトガース大学、コロンビア大学鉱山学校、ロンドン・ロイヤル・ソサイエティなどの大きな実験室から最高の考えを借りています、それらを一つの建物に集約しようとしています。がそれはご想像におまかせします。多くの先輩教師から日本人がいくつもそういう剽窃をしているのをよろこんで認めましょう。

今、その入口の戸と実験室の広いポーチにみなさんをおつれしました。日本人のことはまだ何も話してありませんが、次の便りに書くとして、生徒をあまり待たせるといけないから、もう「サヨーナラ」をいたします。では授業が終るまでグッド・バイ。　キューリオ⑤

ここでもう一度、古い写真をふりかえって見ると、この記事の内容と比べて一致する点が多く見られると思う、グリフィスは他の記事でも、日本人の応用哲学のモットーが「教育は進歩の基礎である」と説明している。そうすると、この一枚の写真が福井のいや日本の新しい教育の誕生のさまざまを語ってくれるように思われてくる。

注1　「ふるさとの想い出福井　写真集　明治・大正・昭和」（国書刊行会　昭和五三）

注2　A Philadelphian in Japan.（一八七二年一月一五日付）寄稿先不明。A Japanese City（日付不明）ホーム・ジャーナルに寄稿。

注3　「グリフィスと福井」（山下英一著　福井県郷土誌懇談会刊　一九七九年）九二―三頁。

注4　New Japan（一八七一年）ミッショナリー・ニューズに寄稿。

注5　グリフィスが好んで使ったペンネーム。